

および LH の低下を認めた。1.5T MRI による dynamic MRI にて microadenoma の局在が同定され、transsphenoidal adenectomy を施行した。腺腫は全摘され、術後、血中 ACTH cortisol, 尿中 17-OHCS および 17-KS は低値となった。また、PRL, FSH および LH の基礎値は正常化し、負荷試験に対する反応も改善した。現在、術後の2カ月で1.5cmの身長増加が見られている。

【考察】小児 Cushing 病の microadenoma を MRI にて同定し得たのは本例が最初であるが、MRI 所見は手術所見と比較し、腺腫の周辺部に数 mm の誤差があり、MRI 上での microadenoma のサイズ決定は慎重を要すると思われた。

#### O-23) Pituitary abscess を伴った Craniopharyngioma の1例

宇都宮昭裕・村石 健治 (大宮赤十字病院)  
岡田 仁・金子 宇一 (脳神経外科)  
近藤 裕美・岡山 健次 (同 神経内科)

症例は36才男性。1993年10月以来細菌性髄膜炎を繰り返した。起炎菌は同定されず全身検索にても明らかな感染巣を見いだせなかった。頭部 CT, MRI によりトルコ鞍に cystic lesion が認められた。下垂体機能検査では、軽度の GH 上昇と LH 低下以外異常を認めなかった。化学療法により髄膜炎が消退した後、経鼻的に腫瘍摘出術を試みたところ下垂体部より膿が流出し、肉眼的に明らかな腫瘍は見られなかった。しかし、病理診断では、abscess の壁の一部に craniopharyngioma の組織が認められた。術後経過は順調で、現在まで髄膜炎の再発は見られていない。

#### O-24) 腫瘍内骨化を認めた頭蓋咽頭腫の1例

吉田 昌弘・池田 秀敏 (東北大学)  
吉本 高志 (脳神経外科)

頭蓋咽頭腫の腫瘍内に組織学的に骨化を認めた極めて稀な1例を経験したので報告する。

【症例】16歳男性。第2次性徴が発来しないことを主訴に来院。dwarfism を呈し、両上耳側1/4盲を認め、ホルモン検査では ACTH, GH, LH, TSH 系の分泌低下がみられた。CT, MRI にてトルコ鞍内から鞍上部進展を示す cystic tumor があり、単純写で前床突起の上方2cmに腫瘍の上面を形成する石灰化を思わせ

る陰影を伴っていた。trans sphenoidal approach にてこの部分を含め腫瘍を摘出した。腫瘍組織は adamantinomatous type の craniopharyngioma であったが、石灰化と思われた部分は osteocytes, lamella 構造を有する骨組織であった。【考察】中枢神経系腫瘍では稀に骨化を認めた例が報告されているが、頭蓋咽頭腫においても極めて稀であるが石灰化のみならず骨化を認める場合があることを念頭におく必要があると思われた。

#### O-25) Intracranial Plasma Cell Granuloma 症例報告と文献の考察

関谷 徹治・赤坂 健一 (弘前大学脳神経外科)  
柴田 聖子・鈴木 重晴 (同 第二病理)  
成田 竹雄 (国立仙台病院 臨床検査科)  
並木 恒夫 (同 臨床検査科)

Plasma cell granuloma (以下 PCG) は肺や上気道に好発する炎症性腫瘍であるが、頭蓋内に発生することは稀である。我々は10年に及ぶ進行性視力視野障害を主訴とする69才男性 PCG を経験した。この患者は10年前の CT で tuberculum sellae meningioma と診断されたが手術を拒否していた。今回はほぼ失明状態となり再受診した。CT, MRI 前頭蓋底に付着する大きな腫瘍を認め髄膜腫の術前診断で手術を施行、全摘した。病理組織学的には、plasma cell, lymphocyte 主体の像を呈し、これらの細胞は免疫組織学的に polyclonality を示していたので PCG と診断した。頭蓋内 PCG はこれまで約10例前後が報告されているのみであるが、免疫組織学的検索がなされるようになってからその報告例が増えている。術前診断は我々同様髄膜腫であることが多く、CT, MRI からは鑑別が困難である。今後髄膜腫の鑑別診断を行う際に一応念頭においておくべき疾患ではあろう。

#### O-26) RT-PCR 法による脳腫瘍の MGMT mRNA 定量解析

渡辺 克夫・峯浦 一喜 (秋田大学 脳神経外科)  
古和田正悦

DNA 損傷修復酵素である O<sup>6</sup>-methylguanine DNA methyltransferase (MGMT) は、腫瘍細胞におけるニトロソウレア剤耐性機序に関連しており、MGMT 活性量が腫瘍細胞の ACNU 感受性の指標として有用である。しかし、従来の <sup>3</sup>H 標識基質 DNA を用いた測定